執筆者紹介、彙報ほか

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金沢大学国語国文学会 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/46391

執筆者紹介

柳澤　良一　金沢学院大学大学院人文学研究科長・教授
第21回卒業・大学院第2回修了
畑中　榮　金沢高等学校講師・大学院第4回修了
河原　修一　岡山県立大学非常勤講師・第29回卒業

彙報

会員著作紹介

※著作の刊行がございましたら、ご一報ください。

金永昊著『浅井了意文学の成立と性格』
（二〇一二年四月刊、J&C、三三四頁、二四〇〇〇ウォン）

緻密な注釈や本文の校合こそが古典文学研究の基本であるという認識は、おそらく多くの研究者に共有されているであろう。しかし、それは必ずしも各国共通の認識ではなく、たとえば韓国における古典文学研究は、個々の作品を文学史的・文化史的にいかに位置づけるかという大局的な観点から行われるのが一般的である。どちらがよいというわけではないが、双方の研究手法の融合は、ひとつの理想といえるであろう。

本書は、その理想を見事に達成した一冊である。本学に提出された博士論文の一部をまとめたこの本は、一方では『三綱行実図』（李氏朝鮮において、民衆の教化を目的に編まれた書物）の諸本を網羅的に調査して和刻本の底本を突き止め、さらに浅井了意による和訳の方法をも明らかにするという、緻密な本文研究に基づく重要な成果を挙げている。そしてその一方で、著者は東アジア漢字文化圏全体における『剪燈新話』受容の様相を解明するという、壮大なテーマにも取り組んでいるのである。

仮名草子の傑作としてすでに高い評価を得ている浅井了意の『伽婢子』は、周知のとおり『剪燈新話』に多大な影響を受けている。そして朝鮮の『金鰲新話』やベトナムの『伝奇漫録』もまた、『剪燈新話』の翻案作である。これら兄弟関係にある諸作との比較を通し、著者は日本文学という枠組みの中だけでは見えてこなかった、『伽婢子』の新たな一面を見出していく。これが了意研究において大きな意味を持つことは言うまでもないが、日韓両国における研究手法の長所を融合させることで、文学研究における新たな方法論が示されたという点においても、本書が刊行された意義は大きい。

その成果が評価され、本書は二〇一三年度の韓国文化体育観光部優秀学術図書に選出された。いまだ日本語には翻訳されていないが、本書が提示した研究の視点は、日本の学界においても広く共有されるべきであろう。日本語版の刊行を鶴首して待ちたい。（丸井貫史）

金永昊著『諸国百物語』訳注』

（二〇一三年八月刊、人文社、三九七頁、二五〇〇〇ウォン）

『諸国百物語』は延宝五年（一六七七）に刊行された怪談集。近世において「百物語」の名を冠した怪談集が多く作られたことはよく知られているが、本作はその嚆矢とされる作品である。日本文学にとってきわめて重要なこの作品が、韓国語に翻訳され、しかも充実した注釈が附されたことを心から喜びたいと思う。

著者は本学において博士の学位を取得した後、韓国に戻り大学の非常勤講師を勤め、現在は東北学院大学教養学部で教鞭を執っておられる。浅井了意をはじめとする仮名草子研究において多くの成果を挙げておられるが、近世文学研究を志したきっかけは日本の怪談に対する興味であったと、以前うかがったことがある。江戸時代の怪談が現代も語り継がれていることの意味について、我々日本人は特に意識することもないが、著者はこの問題を考える中で、現代日本における文化産業の源泉が、膨大な量の古典文学作品と、それに対する文化産業従事者の豊富な知識であることに思い至ったという。考えてみれば、確かに日本の古典文学は漫画やゲームなどの形をとって再生産され続けており、中でも怪談は時代を超えて生き続けている分野である。近年、韓国では日本の妖怪文化に対する人気が高まっていると聞くが、本書もまた日本の文化・文学に関心を持つ韓国の方々に広く読まれることを期待したい。本書が韓国の文化産業に寄与するところも、決して少なくないであろう。

最後に、『諸国百物語』巻二の十「志摩の国雲松と云ふ僧毒蛇の難をのがれし事」が『元亨釈書』巻九「雲浄法師」、巻四の二「ゑい山の源信ぢごくを見て帰られし事」が『元亨釈書』巻九「延暦寺源心」、巻四の二十「大野道観あやしみをみてあやしまざる事」が『武者物語』中巻および『武者物語之抄』巻四の六をそれぞれ典拠に持つということが、新たに指摘されていることを記しておく。著者には、これ以外にも韓国語で発表された多くの研究成果がある。それらを日本語でも紹介されることを、この場をお借りしてお願いしておきたい。

（丸井貫史）

沢井耐三著『室町物語研究—絵巻・絵本への文学的アプローチ—』

（二〇一二年一一月刊、三七五頁、三弥井書店、八四〇〇円＋税）

本書は、著者が長年発表してきた御伽草子関連の論文や資料を一冊にまとめたものである。新稿の論考と翻刻一編ずつも加わる。全体構成は以下のようである。

はじめに、序章「御伽草子にみる「富」について」、一章「「善教房絵詞」—届かない念仏の架け橋—」「「福富草紙」—嘲笑と諷刺—」「「およう の尼」絵巻—梵字の謎—」、二章「「毘沙門の本地」の天界遍歴譚—星の伝説と信仰—」「「宝蔵絵詞」—熊野・切目王子伝承—」、三章「「精進魚類物語」擬人名考—笑いの合戦記—」「「精進魚類物語」擬人名考—笑いの合戦記・追考—」「「鼠の草子（鼠の権頭）」—怪婚譚と女性—」「「鼠の草子（鼠の権頭）」—中世の嫁入り行列—」「幻の「鼠の草子」—巫女の口寄せ詞章を中心に—」、四章「「磯崎」—

嫉妬する女の悲劇―」「『常盤の姥』―滑稽な不孝話―」「『ささやき竹』―物語化の方法―」「『しぐれ』―時雨との出会いと呪詛―」、付編「謡曲『椎天狗』―もう一人の六条御息所―」「狂言『富士松』考」、翻刻「桜井健太郎氏蔵『鼠の草子』」「ベルリン国立図書館蔵『月王・乙姫物語』」、初出一覧、あとがき、主要語彙索引。

本書収録の論考は、おおむね一九九〇年代から二〇〇〇年代に発表されたものである。著者は新日本古典文学大系『室町物語集』上・下（一九八九年・一九九二年刊、岩波書店）の校注者の一人として有名であるが、その校注作業などを通しての成果でもある。

「はじめに」で断ってあるように、室町物語は〈御伽草子〉と総称されるが、著者は〈室町物語〉というタイトルにこだわる。それは新日本古典文学大系でのタイトルに呼応したものでもあるが、御伽草子の呼称は江戸時代に入って作られた作品を多く含むので、室町時代を関心の中心に据える著者の意から外れる部分があるからである。とはいっても、著者の視点はそこのみに留まるものではなく、中世文学から近世文学へと室町物語がいかに架橋していったかが多様な観点から示される。つまるところ、〈下剋上〉といった時代は文学や文化にどのような変容をもたらしたのか、という問題に著者の関心の核心があるように思う。

各論考で取り上げる作品は、いずれも丁寧なあらすじで紹介され、中世文学の専門家でなく室町物語に初めて触れる読者にも、困難なく読める内容となっている。堅実な注釈的研究を基礎にしながらも、たいへん親しみやすい文体で室町物語の本質に迫る読みがクリアに提示されている。

本書の副題に「絵巻・絵本への文学的アプローチ」とあるように、口絵には絵巻・絵本のカラー写真も掲げられている。論考では絵への目配りが読解の重要な視点となっている。例えば『福富草子』関連の論考では、従来極貧者と捉えられてきた福富を、絵の分析から権力者と捉え直し、その権威失墜の物語と読み直すなど、目を見開かされる読みを提示する。また、『鼠の草子』関連の論考では、諸本の成立順を定めた上でそれらを詳細に比較し、絵の分析を通して中世から近世への当該作品の変容を明らかにする。いずれの論も先行の読みを批判しつつ、独自の着眼点からの新しい読みを提示するもので大変刺激的である。

付編にある「謡曲『椎天狗』」の論考は、謡曲に出る六条御息所が『源氏物語』作中人物ではなく、院政期に実在した郁芳門院であることを明らかにしたものである。『椎天狗』復曲の際、この説が採用されたことで評判になったことを記しておきたい。（村戸弥生）

沢井耐三著『室町物語と古俳諧―室町の「知」の行方―』
（二〇一四年三月刊、四五九頁、三弥井書店、一〇〇〇〇円＋税）

本書は、著者が愛知大学を定年退官するにあたって、前著『室町物語研究―絵巻・絵本への文学的アプローチ―』に収録されなかった分の論考を一冊にまとめたものである。全体構成は以下のようである。

はじめに、第一章（『鴉鷺合戦物語』）「『鴉鷺合戦物語』の世界―

諷刺と諧謔の文学―」「『鴉鷺合戦物語』―悪鳥編―」「『鴉鷺合戦物語』―神仏編―」「『鴉鷺合戦物語』―軍陣編―」「遊子伯陽説話の系譜と流布」「『鴉鷺合戦物語』のことば」「福富草紙」―嘲笑と諷刺―」「『およう の尼』絵巻―梵字の謎―」、第二章〔室町物語〕「『筆結の物語』―室町武人の知識とユーモア―」「『猿の草子』―日吉信仰と武家故実―」「『赤松五郎物語』―業平・二条后幻想と尼寺―」「『初瀬物語』―結婚詐欺とドメスティック・バイオレンス―」「猿蟹合戦」の異伝と流布―『猿ヶ嶋敵討』考―」、第三章〔連歌〕「戦国の武士と連歌　点描」、第四章〔古俳諧〕「連歌から俳諧へ―笑いの系譜―」「文明十八年『和漢狂句』全句注解の試み」「『竹馬狂吟集』序文考」「『犬筑波集』の句をめぐって」「お伽草子と和歌・連歌・俳諧」、翻刻「筆結の物語」「紹巴評、楚仙独吟俳諧百韻」「三条西実条の狂歌」「細川幽斎の狂歌　幽斎公御歌」、あとがき、初出一覧、主要語彙索引。

本書前半は、前著に引き続き室町物語に関する論考であるが、本書ではそれだけに留まらず、後半には、連歌や古俳諧についての論考を収録する。前著同様、著者の関心の核心は〈下剋上〉時代を経た文学の変容にあると思われるのだが、それを韻文においても追及したのが本書であり、特にこの時代の文学において顕著になってきた、「笑い」ということをクローズアップする。「笑い」を視点として室町物語から御伽草子へ、また、連歌から古俳諧への史的変容を見通そうとしているのが本書である。

著者の大きな仕事として新日本古典文学大系『室町物語集』上・下の校注がある（著者担当は『鴉鷺物語』『伊吹童子』『さゝやき草紙』『猿の草子』（以上、上巻）、『しぐれ』（下巻））。第一章〔『鴉鷺合戦物語』〕、第二章〔室町物語〕は、その注釈作業などを通して成された論考で、前著に収録できなかった分を含む。『鴉鷺合戦物語』関連の論考は、前著収録『精進魚類物語』関連の論考と合わせて読むと理解が進む。著者は徹底して言葉に即し、言葉の時代的文脈や作品的文脈での使われ方から語義を定位し、作品論に生かすという方法を取る。そのような注釈的研究の方法は、地味ではあるが最も堅実な形で同時代の他ジャンルの文学・文化研究とクロスする。

第三章〔連歌〕では、連歌をなした戦国武士の経歴と人生、人となりを資料を駆使して描き出し、彼らの人生に、連歌や、宗　・宗長といった当時の有名な歌人・連歌人らがどう絡むのかをいきいきと示す。読者は、あたかもドキュメンタリー作品を読んでいるような気持ちになる。

第四章〔古俳諧〕は、筆者の学問的なスタートとも重なる。本書中、最も古い論考は一九七六年発表の「『犬筑波集』の句をめぐって」だが、その頃から注釈的研究方法を取る姿勢は変わっていない。この論考でも地道な注釈作業を通し、先行注釈や読みについて疑問点を挙げ、新しい自説を提示する。また、「『竹馬狂吟集』序文考」では、注釈をもとに編者像にまで筆が及ぶ。その方法は第三章で見た、人物像を明らかにしようとする、いわば歴史学的な方法へと発展する。第四章の最後に置かれた論考「お伽草子と和歌・連歌・俳諧」は、韻文から散文へと広がっていった著者の研究の足跡を忍ばせるもので、本書全体の構成においても、第一章へと回帰するように仕組まれているようでもある。

本書は、一九八〇年代発表の論考が多いが、その後に進展した研

究の成果は、例えば「追記」（二三二頁）などの形でしっかりと補足されている。さらに、新稿の翻刻四編、論考四編が加えられる。新稿の『赤松物語』関連の論考では、本作が、能『雲林院』の夢幻性を取り入れ、王朝物語ふうの傾きを持ちつつ、鎮魂の作品としていることを読み解く。『初瀬物語』関連論考では、本作が、擬古物語に続く公家物お伽草紙として位置付けつつ、中世的な新しさを析出し「ファンタジーよりも社会性に目を向けた作品」として提示する。筆者は「はじめに」のところで、「「笑い」を通じ室町の「知」の行方を見定めたい」と述べているが、その志から常に新しい読みを提出してくれているのが本書である。

（村戸弥生）

日比嘉高著『ジャパニーズ・アメリカ　移民文学・出版文化・収容所』
（二〇一四年二月刊、三八八頁、新曜社、四二〇〇円＋税）

本書は、日系移民に関する文学研究である。序章と全14章で構成されているが、全体は大きく次の4つに分かれている。「Ⅰ　アメリカに渡る法」「Ⅱ　サンフランシスコ、日本語空間の誕生」「Ⅲ　異土の文学」「Ⅳ　移動の時代に」。

本書が研究の対象とするのは、「日系アメリカ移民の日本語による文学活動」である。日本近代文学の研究者にとっては見慣れない作家・作品が取り上げられているが、著者は「彼らの文学が（境域の文学）」であり、それゆえに「批評性」を「引き出すこと」ができるとする。本書を読み進めると、不可視であったものが可視化され、もしかすると私たちは見たい（読みたい）ものしか見て（読んで）こなかったのではないだろうか、と感じることになる。

本書の刮目すべき点は、文学研究を移民研究と接続させていることである。また、序章で言及されているように、「本書の問題意識の背景」には、ポストコロニアル理論、グローバリゼーション研究、例外状態論などの批評理論があり、現代思想への通路も兼ね備えた好著となっている。

（奥田浩司）

鈴木暁世著『越境する想像力　日本近代文学とアイルランド』
（二〇一四年二月刊、四二八頁、大阪大学出版会、四七〇〇円＋税）

本書は、日本近代文学におけるアイルランド文学の受容のありようを論じたものである。単に潮流として捉えるのでなく、芥川龍之介、菊池寛、西條八十、伊藤整などの文学者がそれぞれどのような過程で影響を受けどのように自らの思想や作品に取り込んでいったかを実証的に明らかにしている。

著者によれば、日本においてアイルランド文学の「流行」がおこったのにはその幻想的な側面とそれを取りまく政治的な側面との二つがかかわっており、しかも二つの側面は関連しあっている。その具体的な様相は本書に譲るが、基調としては、日本が欧化しつつも独自性を保とうとしたときに、ヨーロッパのなかにあって独特の経緯で独特の地位を築いていたアイルランドとその文学がモデルとなったことが大きい。アイルランド的な幻想性を消化することがそのま

ま目指すべき日本像・自己像をかたちづくることと結びついていたのである。何をアイルランドに重ね合わせ、その際にどのようにアイルランド固有の問題を捨象したかを見ることで、翻って当時の日本の文学者たちの想像力の限界を見ることができる。

そのような、いわば大きな話をテーマとしつつも、論自体は緻密な資料の調査とテクスト分析を土台にしたものであり、問題の実相が具体的な記述から明らかにされていくさまは本書の大きな魅力のひとつとなっている。また、アイルランド文学からの一方向的な影響だけを取りあげるのでなく、アイルランド文学者からの日本近代文学者の評価を検討したり、受容する文学者側の特別な環境に焦点を当てたりなど、単純に日本近代文学の姿を知るうえでも貴重な知見が多く含まれている。アイルランド文学そのものへの関心の有無にかかわらず価値を見いだすことができる書となっている。

（長尾慎太郎）

次の会員著作につきましては、『金沢大学国語国文』第四十二号で紹介致します。

高山知明著『日本語音韻史の動的諸相と蜆縮涼鼓集』（二〇一四年五月刊、二二四頁、笠間書院、三三〇〇円＋税）

畑中 榮 著『能登詩情　漢詩で読む能登』（二〇一四年八月刊、二五〇頁、うつのみや、一五〇〇円＋税）

卒業論文・修士論文・博士論文一覧

卒業論文　二〇一五年提出分

石井　健悟　田山花袋『蒲団』研究　―価値の再考―
伊藤　結衣　小川未明小説に見える子供と社会との関わり
―「無籍者の思ひ出」論―
桶田幸知香　変化する富樫像
―謡曲「安宅」と歌舞伎「勧進帳」を中心に―
加藤　玻奈　能「賀茂」研究　―「老い」を語る意味―
川端　茜　宮沢賢治「銀河鉄道の夜」ジョバンニ・カムパネルラ論　―終着駅としての「賢治少年小説」―
櫻井　千里　戦後沖縄文学研究――亡霊は何を語るのか――
島崎　詩織　中原中也　【サーカス】研究
張　明哲　明治期の中国語教科書研究
―音声及び会話の部分を中心に―
東山　将大　『古今和歌集』仮名序「六つの歌のさま」例歌考
尾藤　康博　太宰治中期作品における死の概念
福島　瑛里　三島由紀夫【サド侯爵夫人】【わが友ヒットラー】研究
巻山　彬夫　現代日本語助詞「たり」について　―「～たり～たり」文における「たり」の脱落を中心に―
道村　美音　太宰治『お伽草紙』研究
山田　千尋　室生犀星「蜜のあはれ」―金魚という女ひと―
山田　菜美　能〈吉野静〉研究
山本　杏美　夢野久作『氷の涯』研究
―『死後の恋』との比較を通して
山本　美穂　近現代文学における「くだん」研究
吉田美憂香　能《実方》研究　―実方の自己認識―
吉峯　俊　役割語からみた「やんす」論

修士論文　二〇一五年提出分

高橋　悠里　建部綾足発句考――綾足の評点から見る――
早崎　励磁　山中峯太郎の小説に見るアイヌと和人の肖像
鎌田　秀平　夢野久作文学における芸術的価値の検証
―「あやかしの鼓」論
長尾慎太郎　田中冬二は詩において何を目指し何をなしたか
細川　遥　絵画をとおして考える石坂作品
―『若い人』と『陽のあたる坂道』より
劉　小霞　『桜の森の満開の下』論―自己発見を中心に

博士論文　二〇一五年提出分

木越　秀子　読本作者都賀庭鐘の研究

お詫び

『金沢大学　国語国文』第四十号の卒業論文・修士論文・博士論文一覧「卒業論文　二〇一四年提出分」に、誤りがございましたので、次の通り訂正し、深くお詫び申し上げます。

誤：堀　詩芙美　能「源氏供養」研究――能の中に見る紫式部
正：堀　真奈美　能「源氏供養」研究――能の中に見る紫式部

編集後記

○『金沢大学国語国文』第四十一号をお届けします。今号は、掲載論文が三本と例年に比べて少なくなりました。本誌の発展のためにも奮って論文を御投稿ください。「会員著作紹介」欄では、会員の皆様に御執筆頂き、六冊分の書評を掲載しました。御執筆頂きました皆様に感謝申し上げます。著作の刊行がございましたら、どうか事務局までご一報ください。

○平成二十七年度　研究発表会・講演を十月三日に金沢大学サテライトプラザにて開催しました。ホドフ・ホーシャ氏と金永昊氏による研究発表の後、團野光晴氏に「金沢大学北溟寮における伝承寮歌をめぐる一考察―戦後新制大学生精神史研究序説―」と題して御講演頂き、討議が盛り上がりました。夕刻から、金沢市文化ホール内「紅梅」にて同窓会が開催されました。在学生と卒業生・修了生がテーブルを囲み、和やかな雰囲気のなかで近況を報告し合いました。皆様、ぜひご参加下さい。

（鈴木記）

『金沢大学国語国文』投稿規定

○金沢大学国語国文学会の会員は誰でも機関誌『金沢大学国語国文』に投稿することができます。
○日本文学・日本語学に関する研究であれば、時代・分野を問いません。
○枚数は四百字詰め原稿用紙換算四十枚以内とします。ただし、特別号については、別に定める場合があります。
○投稿原稿の採否は編集委員会で決定します。
○編集委員は、毎年第一回目の理事会で選出いたします。
○投稿論文の送り先は左記宛にお願いします。

〒920―1192
金沢市角間町　金沢大学人間社会一号館
日本語学日本文学研究室内
金沢大学国語国文学会事務局

金沢大学国語国文学会会則

第一条　本会は、金沢大学国語国文学会と称する。

第二条　本会は、会員相互の国語国文学に関する研究の促進と連絡をはかることを目的とする。

第三条　本会は、前条の目的を達するために左の事業を行う。
一、研究発表会・講演会の開催
二、機関誌の発行
三、その他必要と認められるもの

第四条　一、本会の会員は、金沢大学文学部日本語学日本文学専攻・国語国文学専攻および金沢大学法文学部国語国文学専攻ならびに金沢大学大学院人間社会環境研究科（日本語学日本文学関係）および文学研究科文学専攻（日本語学日本文学）・国文学専攻の卒業生・修了生、教員、またはこれに準ずるものとする。
二、元教員・元教官は特別会員とする。

第五条　本会には左の役員を置く。
理　　事　　若干名
代表理事　　一名
会　　計　　一名
会計監査　　一名

第六条　一、理事は会員の互選による。但し教官は理事とする。
二、代表理事および会計・会計監査は理事の互選による。
三、役員の任期は一年とする。但し再任は妨げない。

第七条　理事会は本会運営の責にあたる。但し必要に応じて編集委員会等の専門委員を選出任命することができる。

第八条　会務を遂行するため、事務局を金沢大学文学部日本語学日本文学研究室に置く。

第九条　本会の経費は、会費その他をもってあてる。

第十条　会員は機関誌・会員名簿の配布を受ける。会員は機関誌・研究発表会において研究を発表することができる。

第十一条　会則の変更その他重要事項の決定は、総会の議を経なければならない。
総会は、年一回これを開く。

付　則

第一条　会費は年額二、〇〇〇円とする。

第二条　本改正会則は平成十二年四月一日から施行する。

金沢大学国語国文　第四十一号
平成二十八年三月十八日　印刷
平成二十八年三月十八日　発行
編　集　金沢大学国語国文学会
発　行　金沢市角間町
金沢大学人間社会一号館
金沢大学国語国文学会
印　刷　金沢市御影町十九―一
ヨシダ印刷株式会社